

だてむすめこいのひがのこ

〔1〕『伊達娘 恋 緋鹿子』 お七火の見櫓の段

「あらすじ」

本郷駒込の吉祥院の寺小姓吉三郎は、主人左門之助とともに紛失した天国(あまくに)の名剣を探していました。もし見つからなければ、百日の猶予の日限も今宵限り、明六つの鐘を合図に切腹しなければなりません。一方、本郷の大火で吉祥院へ非難した壇家の八百屋久兵衛は大火で店を失い、店の再建のために釜屋武兵衛に借金をしました。武兵衛は借金の返済の代わりに一人娘のお七を嫁にと望みますが、お七は寺小姓の吉三郎に思いを寄せておりました。今宵に迫った吉三郎の切腹を救いたいお七は下女のお杉から武兵衛が天国の剣を持っていることを知ります。しかし暮六つの鐘を合図に町の木戸は閉まり、吉三郎に知らせることすらできません。

町の木戸には火の見櫓があり、火事の際はその火の見櫓の太鼓を打つと木戸が開きますが、もしみだりに太鼓を打つと火刑(ひあぶり)になります。

それを知ったお七は雪の降る中、火の見櫓に駆け上がり櫓の太鼓を打ちます。そこへ武兵衛から剣を奪ったお杉が駆けつけ、お七は剣を持って木戸の開いた雪の町を吉三郎のもとへかけていきます。

